

第1回日仏中国宗教研究者会議報告

土屋昌明

会議の日程

本研究では、平成26(2014)年3月12日・13日、東京の専修大学で第1回日仏中国宗教研究者会議(1st France-Japan International Conference on Chinese religious Studies, SENSU University, Tokyo, March 12-13, 2014)を開催した*1。

注1…本会議は、平成24～26年度科学研究費補助金基盤研究(B)「中国道教の地理的イメージと宗教的ネットワークに関する総合的調査と研究」(研究課題番号:24320009、代表:土屋昌明)の成果の一部である。なお、会議開催の告知において日本道教学会の後援をいただいた。記して謝意を表したい。

テーマ:中国宗教における聖地—宇宙論・地理学・身体論

The sacred sites of Chinese religion: cosmology, geography, physicality

3月12日

Taoist Nature Sanctuaries (開会の辞) …………… Kristofer M. Schipper

The Three Mao Lords in modern Jiangnan: Cult and Pilgrimage between Daoism and baojuan recitation …………… Vincent Goossaert (EPHE)

コメント:森由利亜(早稲田大学)

武當山、龍虎山、佛山祖廟の元帥神…………… 二階堂善弘(関西大学)

北宋東嶽廟祀の傳播—山西定襄東嶽廟碑初探…………… 方玲(CNRS)

コメント:二ノ宮聡(関西大学大学院博士後期課程)

Formation of the New Daoist community in the 19th century Lingnan area: Sacred places, networks and eschatology

…………… 志賀市子(茨城キリスト教大学)

佐命山三上司山続考…………… 横手裕(東京大学)

3月13日

Xishan (Jiangxi): an earthly paradise of filial piety, and a haven from floods …………… Isabelle Ang(Collège de France)

コメント:趙婧雯(大阪府立大学博士前期課程)

聖地与鍊丹—羅浮山・武夷山…………… 鈴木健郎(専修大学)

The Dongtian/Fudi and the sacred places of the emerging Quanzhen Daoism …………… Pierre Marsone (EPHE)

コメント:酒井規史(早稲田大学)

南岳衡山与洞天福地—既是五岳又是洞天…………… 大形徹(大阪府立大学)

雁蕩山與道教…………… 潘君亮(GSRL)

コメント:廣瀬直記(早稲田大学大学院博士課程)

王屋山和無生老母……………山下一夫（慶應義塾大学）
 作爲聖地的王屋山……………土屋昌明（専修大学）
 謝守灝『校正北斗本命延生經』之意義……………三浦國雄（四川大学）

略号
 CNRS : Centre national de
 la recherche scientifique
 EPHE : École pratique des
 hautes études
 GSRL : Groupe Sociétés,
 Religions, Laïcités

使用言語は中国語か英語で、各発表者の使用言語は題目の通りだが、Schipper 氏と Goossaert 氏は、題目は英語で、発表は中国語を使った。

会議の所見

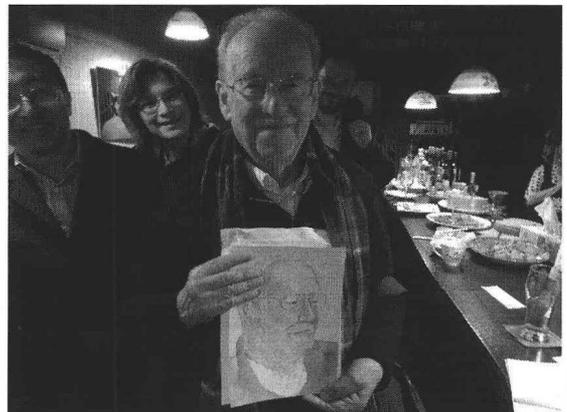
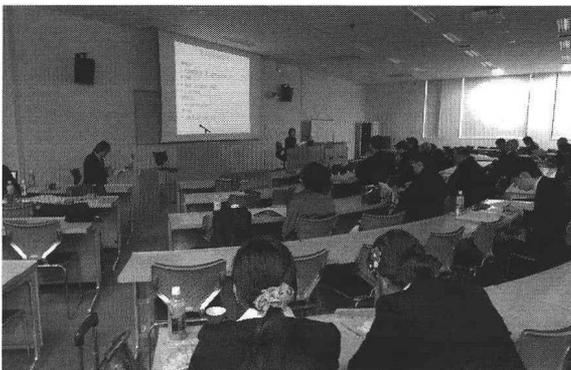
研究発表の概要は、日本道教学会『東方宗教』第 124 号（2014 年 11 月予定）に発表するので、以下は本研究の所見を記しておきたい。

まずこの会議では、主催の研究会の研究テーマである洞天福地研究を発表者が意識しつつ、みずからの研究の観点を進めることができたように思う。日本側の発表者は、6 人が本研究の研究分担者であるから、これは当然とも言えよう。三浦國雄先生は、発表内容こそ道教経典に関する文献的研究を中心としたものではあったが、本研究会のテーマである洞天福地研究に先鞭をつけた方として、貴重な参加となった。志賀市子氏は、「地方道教」の研究を通して、本研究テーマにとっても重要な羅浮山を問題としており、研究協力者として現地調査にも参加協力していただいたことがある。それに対してフランス側の参加者は全員、日ごろの研究では必ずしも洞天福地研究をテーマとしていない。それが意識的に洞天福地研究に関わる形で今回の研究を進め得たのは、フランス側の日本側に対する敬意の表われでもあり、ここで改めて謝意を表したい。

またフランス側の洞天福地に対する視点は、フランス側参加者の指導者であった Schipper 先生の薫陶でもあると私には思われる。本会議の開会の辞にかえて、Schipper 先生は中国人の自然観と洞天福地の関係について述べた。これはご自身の長年の道教研究に由来する持論であろう。身体的な修行をする道教は、自然環境を重視する。宗教研究はとかく理念や神学を重視しがちだが、

図 1 会場風景

図 2 シッペール教授



自然環境が整っていなければ、薬草も清水も煉丹の材料や燃料も入手できず、道教の修行はできない。また、道教の神仙は、そのような自然環境が整っている場所に住っており、彼らに昇仙の道を学ばなければならない。それゆえ道教は、山岳宗教としての性質を備えている。Schipper 先生は、司馬承禎のいわゆる小洞天の第一たる霍童山に関する論文で、こう書いている。「宗教的な条件だけでは（その場所が洞天とされるには）足りない。なぜなら、それでは霍童山の重要性のよってきた原因が示されておらず、その結果を示しているだけだからである。……霍童山が「洞天」である理由は、霍林洞があるためだけではなく、各種の珍奇な薬草を生ずるためでもある。霍童山が各種の珍奇な薬草を生ぜられるのは、その独特の自然環境によっている」*²。そして、このような道教の聖地を Taoist Nature Sanctuaries と命名している。

注 2 …K.M.Schipper 「第一洞天：閩東寧徳霍童山初考」土屋訳『洞天福地研究』第 4 号、2013 年 6 月 18 日、9 頁。

注 3 …Stephen Little with Shawn Eichman, *Taoism and the arts of China*, Chicago : Arts Institute of Chicago in association with University of California Press , 2000.

注 4 …『第 1 回日仏中国宗教研究者会議 予稿集』5 頁～28 頁。また、森由利亜氏による報告要旨を参考させていただいた。

こうした問題意識について、フランス側の研究者は、最も若い潘君亮氏を除いて、学生時代から Schipper 先生の教鞭を受けており、自身の問題意識ともなっているであろう。

実は私自身も、研究方向を洞天福地研究に向けた一つの契機は Schipper 先生に関係する。2000 年末から 2001 年にかけて、The Art Institute of Chicago が開催した道教美術展と、そのカタログに寄せた Schipper 先生の解説によって*³、私は道教を山岳信仰としてとらえる必要に気づかされた。

山岳信仰としての洞天福地の研究は、中国宗教史研究に人文地理的観点を導入することになる。例えば Marsone 氏の場合、終南山に近い村で活動をした全真教が、終南山の大洞天としての宗教的位置づけをどう考えたのか、という観点から検討を加え、彼らにとっての聖山の地理についての検討へと進んだ。また、Goossaert 氏の場合は、諸信仰が実践をおこなう場として茅山を考えると同時に、そこへの信仰が江南地域にどのような宗教実践を誘発したかを考えようとしている。そこで以下、本会議の所見の一つとして、Goossaert 氏の発表「The Three Mao Lords in modern Jiangnan : Cult and Pilgrimage between Daoism and baojuan recitation（道教と宝巻宣講者の間で展開する近代江南の三茅君への信仰と進香）」を考えてみたい*⁴。

諸信仰実践の場としての聖山—Goossaert 氏の研究から

この論は、茅山を中心とする江南で行われた三茅君信仰の史的ダイナミズムをとらえようとしている。そのダイナミズムには二つの軸があり、一つは主に道士たちによる経や懺を中心とする権威的な伝統、もう一つは土着的な信徒たちを核とする宝巻とその宣講の伝統である。

三茅君信仰は、東晋の許家の神降ろし以前に茅山地域に存在し、上清經典に導入された。六朝から隋・唐・宋・元時代の茅山における三茅君信仰は、組織

化された上清派によって支えられていた。これが道士道観による権威的な伝統を形成した。それが三茅君の伝記に反映しており、例えば『三教源流搜神大全』にみえる伝記など、その基本的な内容やテーマは、六朝期とあまり変化していない。中心的なテーマは、成仙脱俗と父母への孝養との間の矛盾に対して、成仙して七祖父母の罪を除くことこそが孝行だという解釈を提示する点にある。茅山では、明末までに組織的な上清派が消滅し、清代に正一道士と全真道士が居住するようになる。清朝から民国時期の茅山の道教は、衰えていたわけではなかった。ゴーサール氏の関心の中心は、この清代から民国時期にある。なぜならそこに、上述の二つの軸の絡みが典型的にみとれるからである。それは、茅山への「進香」（巡礼）に関わっている。茅山への「進香」は、道観道士と宝巻宣講者とがともに活動の背景としており、いわば茅山信仰の中核である。3月18日の進香は、つとに『真誥』にもみえ、19世紀では江南地域で最大規模の巡礼の一つだった。近代の茅山への進香団は、それぞれの地元において「三茅観」「三茅宮」といった施設を作り、3月18日に最大の祭りを挙げる。この行事は、上海・揚州・南京といった都市以外に、江蘇・安徽・浙江にも広がっていた。蘇州の穹窿山、無錫の北の西膠山、南京の鍾山の靈谷等には、小茅山と呼ばれる場所があり、そこで茅山まで進香に行けない人々が代わりに礼拝した。

議論はさらに近代の茅山の宗教文献へと進み、経や宝懺より宝巻、すなわち『三茅真君宝巻（三茅真君宣化度世宝巻）』の重視が解明される。この宝巻は、六朝以来の三茅君信仰を継承しつつ、それを土着的・世俗的に変容させている。しかし、それは道士道観の伝統を疎外するものではなく、場合によっては、道観の道士たちもその出版に関わることすらあった。そして、遠隔地の信徒が進



図3 ゴーサール教授
 図4 予稿集
 図5 懇親会



香に参加するため、茅山から離れた場所の事情もそこに反映されるのであった。このようなゴーサール氏の議論は、茅山という一つの山岳における諸信仰の活動とその関連の歴史を考えている。それによって、道士道観を主とする道教を中心とするような宗教史の枠組みからはずれ、当該地域において現実に機能している、道教と民間信仰との有機的な関係を明らかにしようとする。その観点から中国史を振り返ってみると、六朝から宋元の茅山の民間信仰の軸は、史的な限界によってはっきりしないものの、その存在は確かに窺えるようである。もともと茅君信仰は当地の民間信仰だったのであり、『真誥』にもその様子が述べられているほか、陶弘景の時代の進香の状況も知られる。また、わずかながら唐宋人の言及もあり、このような道教と民間信仰の有機的な関係が歴史的に存続していたのかもしれない。この観点からすると、茅山への信仰を道教史だけで考えるより、総合的に認識できるように思われる。

おわりに一山下氏の議論との関わりで

注5 …『予稿集』138～144頁。また、山下一夫「王屋山と無生老母信仰」『洞天福地研究』第4号、2012年3月25日、55～65頁も参考になる。

ゴーサール氏の議論は示唆に富み、このような観点を洞天研究に生かしていく必要を感じさせられた。この問題で想起されるのは、私どもがおこなった王屋山の現地調査である。

この点は、会議で山下一夫氏が提出した問題に関わる。山下氏の発表「王屋山と無生老母」は、河南省王屋山の無生老母信仰について検討している^{*5}。王屋山は「第一大洞天」とされるが、現在、山上では「無生老母」が祀られ、地域住民による香会が信仰の担い手となっている。周辺地域には無生老母の廟が多数分布し、観音ほかの女神たちが無生老母を拝する「十二老母朝無生」の形で神像が配されている。無生老母は「白蓮教」と称された民間教派の最高神であり、「十二老母朝無生」は、清初の黄徳輝の『開示経』になってはじめて登場する。また、香会に伝承される無生老母説話も、多くが明清の宝巻に由来する。

ただし山下氏によれば、現地の香会は「民間教派」というより「民間信仰」というべき状況だという。以上から山下氏は、王屋山の無生老母信仰は、「民間教派」が「民間信仰化」したものだと結論づけている。

山下氏の議論では、「道教」「民間教派」「民間信仰」の概念を明確化する余裕がなかった嫌いもあり、フロアからはこれらを統一的に捉えるべきだとの意見が出された。それは、まさにゴーサール氏がこれらを統一的に捉えつつ、その有機的な関係を明らかにしようとしているからであった。

実は、王屋山の無生老母信仰の存在は、この指摘と同様な考えの必要性を、山下氏を含めた私たち研究グループにも気がつかせていた。現地では、道教の第一大洞天という価値付けが残ってはいるが、それよりも無生老母信仰の聖地としての価値の方が高いかのように、洞天としての核心的な洞窟である王母洞

およびその周囲は、無生老母によって占拠された状態になっている。かつて第一大洞天の祭祀がおこなわれた天壇山上には、道観らしき建物があって、北京の白雲観で学んだ道士が居住してはいるものの、道教の祭祀活動が盛んにおこなわれているようにはみえない。こうした現地の状況に鑑みると、王屋山という信仰の場の歴史と諸信仰の相互関係を明らかにし、その中で洞天思想も位置づけるべきだと考えるようになった。

王屋山の無生老母と道教の関わりについて、ゴーサール氏の観点をモデルとすれば、次のような作業仮説を考えることができるのではなかろうか。王屋山における無生老母信仰が、山下氏のいうように、清朝の民間教派の流れを汲んでおりながら、「民間教派」というより「民間信仰」であり、民間教派だったものが民間信仰化したとすれば、それは、たんに一民間信仰の勢力の消長の問題であるだけでなく、王屋山の道士道観の歴史とも関わっている。つまり、清朝以来の王屋山の道士道観が、何らかの原因で民間の信徒の活動、とくに「ご利益」を求める「進香」活動の受け皿を提供できなかった結果ではなかろうか。簡単に言えば、近代の茅山は道教と民間信仰のタッグの成功例であり、それとの対照でいえば、王屋山はその失敗例ではなかろうか。

いずれにしても、ある地域の宗教史を考えるにあたって、ある山岳（洞天）を中心とした道教と、そこに関わる民間信仰との相互関係のダイナミズムを見いだしていく観点を考慮する必要がある。そのためには、中国史に対する長いスパンの観察が必要であろう。それとともに、フィールドワークによって現在の状況を把握し、その社会的なメカニズムを理解した上で、それを過去の同様な条件における一種のモデルとするのも、有効な方法の一つかもしれない。

以上、この会議から得たことは多いが、本稿ではごく一部の観察と研究に関する反省をとりあげた。参加された方々には、それぞれに本会議から得たところが大きかったことを本研究の代表者として切に願う。本会議を基礎に、さらに日仏の学术交流を深め、斯学の発展を期したい。

謝辞

Kristofer M. Schipper 先生、発表されたフランスの先生方、三浦國雄先生、吉田隆英先生、志賀市子さん、コメンテーターの森由利亜さん、酒井規史さん、二ノ宮聡さん、廣瀬直記さん、趙婧雯さん、フロアおよび懇親会にご参加くださった先生方、通訳の渡名喜庸哲さん、吉田さわこさん、そのほか御協力下さった方々に本研究グループを代表して心から謝意を表します。